

「…いつもの部屋…だよね？」

朝。魔王様の部屋で目が覚めて思ったことがまずそれだったわけだけど、

あんなことがあった後じゃ仕方ない、と思う。

本当に、目まぐるしくて大変な出来事だった。

もし魔王様が来てくれるのがもう少し遅かったらと思うと、今でもゾッとする。

抵抗の叶わぬ相手。圧倒的な力。心の奥底まで陵辱し尽くそうという、

あの眼差し。

あともう少しで刻まれていた、消えない傷跡。

「はぁ…」

着替えを済ませつつ、溜息が口から出てしまう。

僕にそんなトラウマを残した相手、イザリアさんが今この魔王城にい

る。

魔王様は我慢してくれと言ってたし、勿論そうするつもりだけれど、

正直言ってまあまあ、いや、かなり陰鬱だ。

うまくやっていける自信がない。

ばったり出会ったりしたらその場で倒れてしまったりしないだろうか。

うん、怖いからしばらくはずっと魔王様と一緒にいようかな。

もしかしたら政務の邪魔になってしまうかも知れど、まあその時は諦め

てこの部屋に引き籠もることにしよう。

「はあ…」

再び溜息をつきながら、部屋を出ようと扉を開けたその時。

「のおおおおりやあああああ！！」

うん？

なにやら随分と勇ましい(?)雄叫びが響き渡ってきた。

…え？

何？今の？

しかもよくよく耳をそば立てると、どうも継続的に声を上げているらしく、唸り声のような低音が今も響き続けている。

っていうかこれ、イザリアさんの声では？

しまった。ずっと魔王様と一緒にいようという計画だったけど、先にイザリアさんに遭遇してしまえば全部おじゃんだ。

いや、でもこれどんな状況なんだ？

どうして朝からこんな声を？

会いたくない。全くもって会いたくないけど、凄く気になる。

もし何か変なことをやっているのなら魔王様に報告しないとだし。

「よし…い、行こう…！」

そうして僕は、意を決して、今なお声が響き続ける、その発生源へと歩みを進めるのだった。

「姉上え！余の城に来た次の日にもうこんな事をやらかしてくれるとは！

さすがであるな！なあ姉上え！」

「ああそりゃお褒めに預かり光栄だね！なんなら明日も明後日もやってやろう

か？ああ！？」

覚悟して声の発生源と思しき部屋の、その扉を開いた僕の目の前に繰り広げら

れていたのは、

互いのツノを握り合い、そのまま間近で睨み合いを続ける 2 人の姿だった。

え、何これ、何してるの？

ツノを握り合って怒声を浴びせ続けるというあまりに常軌を逸した光景に呆気

にとられ、思わず思考が止まりかけた時。

「おはようございます。旦那様。」

メイド長のリエラさんに声をかけられた。

僕より先にこの部屋で二人の喧嘩。喧嘩？を見守っていたのだろうか。

あんまりな様子の二人を見て呆気にとられてしまい、気づかなかった。

「お、おはよう、ございます。あの、これは一体…」

「はい、実は…」

そう言って、うんざりしたような目で二人を見つめながら、リエラさんは事のあ

らましを語ってくれた。

時は、二人がツノを握り合う、その1時間前に巻き戻る。

あてがわれた部屋の中で一人、イザリアは退屈を持て余していた。

「あー、暇だ。こんな時間じゃどこの店もやってないし、イルヴィアはもうどこか行ってるみたいだし。」

はてこの退屈をどう解消したものか。

そう思案しながら気怠げに椅子に腰掛け窓から外を眺めていたイザリア。

ふと眼下の地面に視線を向けた彼女の目に映ったものは、

今まさに地面から這い出てきた巨大なセミの幼虫であった。

「あれ、閻魔ゼミじゃん。幼虫でもやっぱでっかいんだなあ」

そのセミこそ魔界の夏をけたたましく震わせることで悪名高い閻魔ゼミ。

その幼虫であった。

ゆうに1メートルはあろうかという桁外れの巨体であったが、

この魔界では特段珍しいことでもないのか、なんとはなしに眺めていたイザリ

アであったが、ここであることに気が付く。

「うん？地面からでてきた…ってことは…。あっ、木に登り始めた！そうだ！やっぱりそうだ！」

瞬間、飛び跳ねるように立ち上がり部屋から駆け出していくイザリア。

その顔には既に退屈さなど欠片も感じられず、とにかくこの一大事を妹のイルヴィアに伝えなければならないという使命感に満ち満ちていた。

「イルヴィア！イルヴィア！イルヴィア！！大変だぞ！」

そう喚き立てながら、イルヴィアがいるという会議室へとひた走る。

途中出会ったメイドがイルヴィアの居場所を知っていたのはまさに僥倖であった。

しかし、そのメイドは続けてイザリアに何かを話し、引き留めようとしていたのだが、それは叶うことなく、そしてそれこそが今回、魔王とその姉がなんともみっともない喧嘩をすることになった遠因となってしまう。

が、魔王の血族たるイザリアがその力をもって電光石火の如く駆け行くのであ

る。それを止められなかった責を一メイドに問うのはあまりに酷であろう。

さらに言うならば、魔王が会議室にいる理由など凡そ窺い知れるものだが、

そこに考えが至らなかったイザリアにも責任の一端があることは明らかである。

会議室の扉が目の前まで迫る。

一刻も早くこの一大事を可愛い妹に伝えてやらねばならない、その一心で

吹き飛ばさんばかりの勢いで扉を開け放つ。

いた、イルヴィアだ。

伝えなければ、これを！

「おいイルヴィア！閻魔ゼミが羽化するぞ！前から一度見てみたいって言って

ただろ！今から始まるとこだからまだ間に合う！ほら！早く来いって！！」

満面の笑みで大スクープを知らせるイザリア。

告げてやった。言ってやった。そんな満足感に包まれ、

己が務め果たしたことで少しずつ冷静になってきた彼女の視界に入ったのは、

各地方の政務代表者たちの、その面々であった。

イザリアはここでようやく察する。

魔王が会議室にいるということは、つまりどういうことなのかと、

先ほどのメイドがなにか言っていたのはなんだったのかを。

代表者たちの驚いた視線が自分に集まる。

これでもかと目を丸くし、状況を掴みかねているようだ。

当然である。あの魔王イルヴィアの姉がなにやら訳のわからないことを叫びながら、重要な政務会議の場に飛び込んできたのである。

その驚きようは、水を打ったように静かになったこの場の雰囲気が全てを物語っていた。

「あー、あの、えーと」

さすがのイザリアも状況がわかるにつれたじろぎはじめ、思わず妹に目を向ける。なんとかしろ、助けろと、その目は如実にそう訴えていた。

そんな、姉からの助けを乞う視線であったが、

そのあまりにも切実な SOS は、イルヴィアの己が顔を覆う両手によって完全に阻まれ、届くことはなかった。

そのまま俯き、沈黙するイルヴィア。

魔王の心中、いかばかりか。

しかし、いつまでもこうしてはいられない。

思考放棄したくなるのを、魔王としての気概と誇りを胸になんとか踏みとどまり、両手を顔から離し姉と向き合う。

とりあえず、適当なことを言って、このバカを会議室から退去させねばならない、それらしい感じに。

「あ、姉、姉う、あ、いや、イ、イザリア、よ。」

喉奥から絞り出すように言葉を発するイルヴィア。

姉上と言いかけてやめたのは、皆の前でコレが自分の姉だと公言するのがはばかられたからである。

当然イザリアが自身の姉だということなど周知の事実だが、それでも今ここで姉上という言葉を発することはどうしても嫌だったのだ。

「ど、どうも重要な報告のようであるが。見ての通り今は会議中でな。火急の要件でなければ後にしてほしいが、どうか。」

とにもかくにも、今は姉妹ではなく魔王と臣下として言葉を交わし、

何事もなかったかのようにここを立ち去らせる。それしかない。

流石に姉妹というべきか、二人の間でこの考えは一致を見せ、イザリアはその場で傳く。

「大変失礼いたしました。イルヴィア陛下。

では、後ほど改めて報告に上がらせていただきます。

会議の邪魔立て、何卒ご容赦を。」

表情、声、所作、その全てが魔王の血筋に連なるものとしての品を感じさせる

見事な佇まいであった。

これがセミの羽化を大声で報せにきたことを誤魔化しているのでなければ、だったが。

「うむ。下がるが良い。」

「はっ。」

立ち上がると共に踵を返し、どこまでも見事な立ち振る舞いで出ていくイザリ

アであったが、

その頃は会議に集まった代表者たちはすっかり今の出来事で頭がいっぱいになってしまい、その後はろくな話し合いができなかったのであった。

「そして、今に至るわけでございます。」

「なるほど…」

「ぬえええい！皆が集まれるタイミングなどそうそうあるものではないのだ！だというのに、姉上のせいで皆頭の中が閻魔ゼミでいっぱいになってしま

ったではないか！どう責任をとってくれるのだ！」

「お前が見たい見たい言ってたから！それを見せてやろうっていう姉心だろう
が！泣いて喜べ馬鹿野郎！！」

「いつの話をしておるのだ！子供の時であろうが！！ぬあああああ！」

「にえあああああああああ！」

事情はわかった。

というか魔王様、僕が起きるよりもずっと前から会議なんて始めていたのか。

今更ながらあの人の健康に不安を感じてしまう。あまり無理しないでほしいな
あ。

さて、事情はわかったと言ったものの、あの2人を見てからずっと気になってい
ることがまだ他にもある。

「あの、アレは一体何をしていますか？」

「何、とは？」

と、少し考え込んだ様子のリエラさんだったが、すぐに「ああ」と僕の疑問に思い至ってくれた。

「確かに、ツノがなく、それも別世界の住人であった旦那様には、不思議に思われるのは当然でしたね。これは失礼いたしました。」

なるほど、その口ぶりからするとどうやら目の前のこの光景はこの世界ではさほど珍しいものではないらしい。

「あれは喧嘩の方法の一種です。」

「喧嘩、ですか。」

喧嘩をしている、というのはあの2人の様子を見ていればすぐにわかるが、あれがその方法？

「互いのツノを持って、折り合うのです。先に相手のツノを折った方がそのケンカの勝者、ということになっております。」

「お、折るんですか？」

ツノを折るという物騒な単語がにわかにでてきて思わ聞き返してしまった。

大丈夫なのかそれ？

「ツノって、折れちゃっても平気なんですか？」

「はい。ツノは少しすればまた元に戻りますし、元々ツノが折れること自体そう珍しいことではありません。場合によっては、寝返りの時などに折れてしまうこともあります。」

あ、そうなんだ。

ってというか寝返りしづらそうとは思ってたけど、やっぱり折れるのか。

ああ、だからこの世界、枕屋さんが多いのかな。きっとそれぞれのツノの形に合わせた特注枕を作ってもらうんだろう。

こんな形で魔界の不思議が一つ解かれてしまうとは。

「元々子供のケンカなどでよく行われるものですので、いい年をした大人がするような方法ではない…なのですが…」

そう言いながら嘆かわしそうに2人を見るリエラさん。

今も相変わらず「ぐぬぬぬ」とか「にぎぎぎぎ」とか言いながら互いのツノを折ろうと必死の形相だ。

「まあ、あのお二人の場合、持っている力が計り知れませんので、ああして平和的なケンカになるよう努めている、という意味合いもあるのだと思います。」

「ああ…」

なるほど、確かにそれはそうだ。

昨日魔王様がイザリアさんに放った攻撃だけで、あの人の館を吹き飛ばしてしまったのだ。

もし2人が全力の喧嘩をしたらと思うと、ゾッとする。

っていうかなんであの攻撃くらってイザリアさん生きてるんだらう。

しかし平和的とはいえ、突出した力をもつ2人だからなのか、

こうして眺めているだけでも中々の迫力だ。

その凄まじさたるや、恐竜が縄張り争いをしたらこんな感じなのだろうかなあ

と思ってしまう程である。

「おお！起きておったか！待っておれ、今このたわけのツノをバキ折って、それを朝食の合図としようではないか！」

と、そこで僕がいることに気づいた魔王様が意気揚々と物騒なことを語りかけてくれた。

「いいのかいそんなこと言ってえ！10回に1回ぐらいは私が勝ってるんだ。

彼の前で恥をかくかもしれないぞ！」

「というかだな、せっかく城におるのだから姉上も会議に参加せよ！

いつまでもぐーすかと惰眠を貪りおって！」

あ、すみません魔王様。それは僕にも刺さります。

それにしても、だ。

「あの2人って、いつもこんな感じなんですか？」

姉妹とはいえ片方は魔王だ。

そんな2人がどんな距離感でどのような思いを持って

過ごしてきたのか、まるで想像ができない。

僕を助けに来てくれた時はかなり怒ってたから、あれは例外としても、

もっとう、互いに憤懣やるかたない思いを抱いていたり、鬱屈していたり、

捻れた感情を持っていたり、なんてことを漠然と思っていたりした。

だからこそ、目の前で繰り広げられるこの光景に面食らってしまったのだが。

「はい、私の知る限りでは、よくああしてどうでもいいことで喧嘩をしたりしておりました。」

自分の主が喧嘩する理由をどうでもいいと言ってしまうのはどうなんだろうと思うが、しかしそうか、そうなんだ。

たぶんあれが魔王様の素なんだろう。

僕の前で見せる、心を驚掴みにされるような、凄みと魅惑を同時に纏ったような在り方。

それもちろん素ではあるのだろうけれど、

でも普段は魔王という立場からの言動ばかり見ていた僕にとって、ああして

臆面もなく声を上げ子供みたいに怒る魔王様は新鮮に思うと同時に、

そんな風になんの気兼ねもなく相對してもらえるイザリアさんに少し、

嫉妬してしまうような、そんな感情が芽生えてしまった。

と、そんな思いを頭が過ったと同時に、すぐに打ち払う。

いやいや、いけないいけない。

婿である僕と血のつながった姉に対する態度が違うなんて当然のことで、それ

で妬いてしまうなんて理不尽というか、おこがましいにも程がある。

「ちなみに」

「はい？」

自己嫌悪になりかけていた僕にリエラさんが言葉を続ける。

「昨晚、イザリア様にも同じことを聞かれました。

陛下と旦那様について、あの２人はいつもああなのかと。」

ああ…、それはきっとあの営みのことについて、だよね。

途中でイザリアさんが文句を言いに来てたし。

魔王様には気にするなって言われて、その後は僕も夢中になっちゃってたけど、

うう、なんだか今になって恥ずかしくなってきた。

「今まで陛下と対等な関係であったのはイザリア様のみでしたので、旦那様に
対して、少し妬いているのかもしれないね。」

うぐっ。

まるでこちらの心を見透かしたかのような発言。

か、顔にでてしまっていたらどうか。いや嫉妬って顔にでるものなのか？

けどリエラさんもかなり察しのいい人だもん。さすがメイド長になるだけはあるってことか。

そして事実、イザリアさんも僕に嫉妬していると言われ、少し心持ちが楽になっ
てしまう自分がいたりするわけで、うーむ、これがメイド長の実力なのか。

などと、しみじみと思いを馳せていた頃、

「そこだぁー！！」

「あゝ あゝ あぁぁいっただぁ！」

「ふはははははは！余の勝ちである！」

どうやら、喧嘩の決着がついたようだ。

ツノって折れたら痛いんだ…大丈夫かな？

「つぁぁ…頭に響くぅ…」

と、思ったが、どうやらツノ自体がどうこうではなく、

折れた衝撃が頭に来るらしい。

城に来た翌日にツノを折られてしまうとは、あんなことをされた身ではあるけ

れども、イザリアさんが少し可哀想になってしまった。

「どうだ！余の勝利の姿、とくと見惚れたか！」

そう言って手にしたツノを掲げて僕を見る魔王様。

まるで凱歌をあげる将軍のようである。

あ、いや、まずいかもしれない。

いくら鎮まってきたとはいえ、リエラさんに悟られるぐらい顔に出ていた嫉妬心だ。

もし魔王様が見ようものなら。

「…ほう。お前。」

そういつてニヤリと笑みを浮かべ僕の元へ。

そうですよね、やっぱり一目瞭然でしたよね。

ずいっと目の前まで迫る魔王様。

「あ、あの…」

ダメだ、やっぱり面と向かうと未だにドキドキしてしまう。

ああ、僕は本当にこの人が好きなんだと、いやでも思い知らされてしまう。

そんな愛しの魔王様が耳元に口元を寄せ

「妬いておったな？」

囁いてくる。

「っ…う…」

やっぱり、バレバレでしたか。

一気に顔が赤くなってしまうのが、自分でもわかる。

バレてしまった恥ずかしさ？

些細な機微を察してもらえた喜び？

もう自分でもわからない。

そんな僕を見て確信に変わったのか、魔王様はさらに

「黙っていてはわからんぞ？構わん。素直に申せ。」

そう言われてしまったら、もう口を開くしかない。

こっちの考えてることなんてもう全部見抜いてるんじゃないだろうかという目、

なのにどこか安心してしまうような、そんな眼差し。

こんな目で見られて隠し立てなんてできるほどの精神力なんてないし、

それはきっと魔界の誰もが同じだと思う。

「は…はい、そうです。」

自分でも聞き取れるかどうかといった、まさに蚊の鳴くような声の情けない返

事をしてしまったが、それでも魔王様の耳にははっきりと届いたらしく、

耳元から離れ僕の顔を正面から見る魔王様はさらに目を細めて不適な笑みを浮

かべていた。

どうしよう、こんなことですぐに妬いてしまう面倒な奴だなんて思われたら、

ちょっとキツイものがあるぞ。

けれど、魔王様から告げられた言葉は、そんな僕の不安とは全くかけ離れたもの

だった。

「ふ、そうか、妬いたか。」

よい。なんら恥じ入る必要も忌避する必要もない。

お前のその想いは、それだけ余に惹かれ、

余を独占したいという当たり前のものだ。余と共にあって、そう感じぬわけがないのだからな。むしろ、お前がそのような気持ちを抱くこと、
余は嬉しく思うぞ。」

思ってもいなかった言葉に、また顔が赤くなってしまう。

いつも思うけれど、この人はなんでこんなことをスラスラと言えてしまうのだろうか。

聞いているこっちが恥ずかしく…いや、嘘だな、喜びを感じてしまう。

「とはいえ、お前にそんな思いを抱かせる暇もないほどに愛してやるのが望ましくはあるのだがな。どれ、では早速実践してやるとしよう。」

そういつて魔王様は僕の両頬に優しく手を添える。

ああ、もう次に何をされるかわかってしまう。

魔王様の顔が近づく。不適な笑みは相変わらずだ。

いや、ちょっと待った、確かここにはまだリエラさんとイザリアさんがいる、
さすがに二人に見られながらというのは気まずいというか恥ずかしいというか。

「あの、他の所で、ん、んう」

僕の抗議をまるで聞こえていないかのように口付けをする魔王様。

魔王様のことだ、今のだって絶対に聞こえていただろうし、

そして僕が言葉とは裏腹に、魔王様とのこの行為を喜んでしまっていることも、

やっぱり絶対わかっているに違いない。

「ふう。うむ、よい顔だ。」

そう言うってことは今、僕はとんでもなく惚けた顔をしているんだろうな…。

そのまま魔王様の唇の余韻に浸りたいところだったけれど。

側で2人が見ていることを思い出し、慌てて気持ちを整える。

「いくらでも余に焦がれ、妬き続けるがよい。

お前がどれほど嫉妬の炎をたぎらせようとも、

余の愛という、それ以上の炎を持って、その全てに応え切ってみせよう。

よいな？」

「は、はい…」

もう、そう答えるのが精一杯だ。

困る。気持ちを整えようとした矢先にまた掻き乱されてしまった。とても、困る。

「なあ、本当にあいつら、いつもこんな感じなのか？」

「はい、いつもこのような感じでございます。」

イザリアさんとリエラさんのヒソヒソ話が聞こえてくる。

そうだ、思わず魔王様に飲まれてしまったけれど、

そういえ今のやりとりもずっと見られてるんだった。

けれど、うん。

さっきの子供じみた喧嘩の様子や、僕に対して妬いているなんていうリエラさ

んの言葉もあって、

さっきまで抱いていたイザリアさんへの恐怖はかなり薄れたような気がする。

なんとなくわかったけど、たぶんイザリアさんも魔王様、

というか妹のことが好きなんだ。

それこそ、セミの羽化を知らせる、なんてことのために城中を駆け回るほど。

そして、そんな大好きな妹だからこそ、結婚相手、つまり僕のことが全く

連絡がなかったというのもきっと相当堪えたに違いない。

僕を攫うことで魔王様への嫌がらせをしてやろうと思ったのも、ショックだった

気持ちの裏返しというか、それだけ魔王様のことを妹として大事に思っていた

た…ということなんだと思う。

まあ、それについてはほとんどイザリアさんのうっかりが原因だったわけだけ

ど。

とにもかくにも、苦手意識が完全に抜け落ちた、とはまだ言えないものの、

少なくともぼったり出会ったらどうしよう、とは思わなくなった。

きっと、うまくやっていけるはずだ。

そして、そんなイザリアさんによって、魔王城での生活はこれまで以上に賑やかなものになるに違いない。

未だ魔王様との口付けの感触に酔っている頭の中で、ぼんやりと、
新たな住人が加わった城での暮らしに思いを馳せるのだった。